

FED 議長決定と習近平の決断

FED の議長候補にケビン・ウォーシュが指名された。去年から今年にかけて最有力候補が国家経済会議議長のハセットから元 FED 理事のウォーシュへ、それからブラックロックのグローバル債券 CIO のリーダーと変化したが、結局ウォーシュに決まった。

この決定過程で気づいたことは二つある。一つは市場の反応が厳しくない人物を選んだことだ。決定時期が何度か先延ばしされたが、有力候補に対する市場の反応を見極めるためだったのだろう。

ウォーシュ以外の候補者は利下げ方針が明確で、トランプ大統領に近すぎる印象を与え、FED の独立性に対する懸念が強くなる可能性があった。それによりドル離れが進み、長期金利の上昇の可能性が高まる。これはトランプ政権にとって最悪のシナリオで、特にベッセントはこのシナリオを避けたかった。

二つ目は、財務長官のベッセントの役割が大きかったことだ。最有力候補が変遷したのもベッセントの情報操作によるものだったろう。それにウォーシュは著名投資家ドラッケンミュラーのファミリーオフィスのパートナーでもあった。ドラッケンミュラーはジョージ・ソロスの右腕としてソロスのファンドの運用を担当した。90 年代初めのポンド危機でイングランド銀行を破った男としてソロスは名をはせたが、ドラッケンミュラーの力が大きかった。

当時ベッセントもソロスのファンドで働いていたので当然ドラッケンミュラーとの関係は深い。ウォーシュの採用に関しては相談したに違いない。

ウォーシュ指名の発表後、株が売られ、金などのコモディティが急落し、ドル高になった。ウォーシュの過去の言動をベースにした短期ポジションのカバー取引が中心で、方向感は定まっていない。

ウォーシュは以前 FED の量的緩和政策を批判し、FED のバランスシートの縮小を主張。米国債に関してはなるべく財務省に移管するなど、FED の業務領域の縮小を主張。AI の活用でインフレ抑制につながり利下げ環境が整う可能性の指摘など。

以前の主張などからはドル高かドル安かは決め難い。インフレ懸念がある時、トランプの利下げ意向にどこまで応えるのか。トランプの政治的圧力にパウエルのように対峙できるのか。FED の独立性を保ちながら大統領とのスタンスどう図るのか。実際にポジションについて見ないと不明な点だらけだ。

もっと長い目で見ればトランプ政権が引き金を引いた戦後の世界秩序の転換に由来するドル離れは一層重要な問題だ。そこに新しい動きが出た。習近平による人民元の国際化の促進宣言だ。具体的には準備通貨の役割を担うことだ。人民元は既に貿易決済など決済通貨としては国際化が進んでいるが、外貨準備の通貨としての国際化は全く進んでいない。否、後退している。

世界の中央銀行が外貨準備として保有する人民元の割合は 2%にも満たない。ドルは 57%ほどだ。人民元の割合は近年増加傾向にあったが、最近では減少傾向に転換した。人民元は国際化をあきらめたのかと思った。

だがここにきて習近平が人民元の準備通貨化を目指す方針に転じた。最近のドルの変化を見てのことだろう。ドル離れの現象だ。ドル離れには二つの面がある。為替のドルから他の通貨への転換と、ドル資産から他の通貨資産への転換だ。今年の 4 月のリバレーションデイ以降のドル離れは為替の他通貨への転換が主だった。今回のドル売り局面もその傾向が強い。ドル資産の売りには即繋がらない。

これはドルに代わるべき有力な資産市場が他に見当たらないことが一因だ。大きな金額を瞬時にさばける市場の深みや、法的安定性を備えや市場だ。外貨準備通貨としてシェアを伸ばすにはこうした条件を備える必要がある。それに資本取引規制の緩和も必須になる。中国はそうした方向を目指すということなのだろう。長い道のりだが方向性は正しい。